

2016

新入生にすすめる本

日本赤十字九州国際看護大学

教員によるブックガイド

本学の先生方が新入生の皆さんに薦める図書のリストです。
古典から新刊まで、知的な刺激に満ちた本が紹介されています。

教員名	書名	編著者名	コメント
阿部 オリエ	キラリ看護	川島みどり	‘看護の魅力’について、解り易く語りかけられている本です。看護職になりたくて入学した人も、そうではない人も、ぜひ、手に取って読んでほしいと思います。きっと、看護職になるってどうということだろう!?と自分自身に問うきっかけになると思います。
	性の歴史 I・II・III	ミシェル・フーコー	とっつきやすい本ではありません。ですが、人間の‘性’に関して探究することや哲学的な思想に気づくなど、この本は様々な刺激を与えてくれます。難しい言葉の羅列をリラックスしながら読みふける。大学生の今じゃないとできません。
	ここ：食卓から始まる生教育	内田美智子、佐藤剛史	とても読みやすい本です。現在、多様な‘性教育’は行われていますが、性教育が生教育、いわゆる生きるための教育、生きた教育、生かす教育になるには、何が必要なのか……ということを問いかけてくれます。自分と家族、そして、これから親になるであろう皆さんに、自問自答しながら読んでもらいたい本です。
青木 佳奈	夜と霧	ヴィクトール・E・フランクル/著：池田香代子/訳	新しいページをめくる時、この先どんなことが書いてあるのかなとワクワクする瞬間が好きだ。だから、あまり繰り返し読むタイプではなかったが、あることに気が付いた。本は購入後「すぐ読む」と、その後「少し時間をおいて再び読む」と、「更に期間をおいて再度読む」とでは、琴線に触れる部分や、そこから感じとる風景やメッセージ、読んだ後に自分の中に残る香りが全然違うことだ。同じ本だと勘違いしているのかなと慌てて、作者と題名を確認するほどである。きっと、それまでに積み重ねてきた経験がそうさせているのだろう。また、今、目に留まった部分はその時の自分にとって必要な内容なのだろう。そうすると、単に知性を深めるために読むだけでなく、その時の自分にとって必要なメッセージを探するという目的で本を使うのもある意味占いっぽくて面白いのではないだろうか。
	星の王子さま	サン＝テグジュペリ/作：内藤濯/訳	
	我関わる、ゆえに我あり：地球システム論と文明	松井孝典	
東 優里子	がんばれ!!小さき生命(いのち)たちよ：村田修一選手と閏哉くんと の41カ月	TBSサービス	この本は私が看護師としてNICUに入職した時に、病棟の医師から勧められた本です。皆さんは「NICU」と聞いて、どのようなイメージを抱きますか？私は初めてNICUに足を踏み入れた時、見たことがない赤ちゃんたちの姿に対し、哀れな感情を抱いていました。しかし、この本に出会い、NICUで過ごす赤ちゃんたちやご家族に対する思いや見方が変化しました。どのように変化したかは、皆さんがこの本を読んで体験してください。NICUの赤ちゃんやご家族に寄り添って、看護を実践したい気持ちになると思います。
	死ぬ瞬間の子供たち	E.キューブラー・ロス/著：川口正吉/訳	看護は患者の生と死に向き合う職業であるため、看護を学ぶ中で、著者に出会うと思います。この本は学生時代に読んだ本ですが、臨床でターミナル期の赤ちゃんを受け持った時に看護の方向性に悩み、再びこの本に辿り着きました。自分の思いや希望を言葉にすることができない子どもに対し、最期をどのように迎えることが望ましいのか、本に登場する子どもとご家族の様々な事例からヒントになる要素がたくさんあります。
千原 明美	平静の心：オスラー博士講演集	オスラー/述：日野原重明、仁木久恵/訳	看護学生の頃に初めて読んで、今でもときどき思いだす有名な言葉が載っています。医学生、看護師、実地医などに対して行った講演がまとめて記載されており医学を目指す方には是非読んでいただきたい1冊です。
	トリセツ・カラダ：カラダ地図を描こう	海堂尊/著：ヨシタケシンスケ/絵	「チーム・バチスタ」の著者が、からだのひみつを解き明かし、カラダの地図を手に入れようという目的の本です。人間のからだのわかりやすい内容で、説明されています。入学時から、毎年この本を読む前と、読んだ後に、からだの地図を描いてもらいみなさんの個展を開いていただけると嬉しいです。シリーズで、トリセツ・ヤマイもあります。
	ぼくがいま、死について思うこと	椎名 誠	怪しい探検隊シリーズを書いた著者が70歳を前に、死について考えたことが記載されたエッセイです。お墓の話、葬儀の話などいろいろなことがまとめられています。死の場面などに接する機会が少ない若い方に読んでいただければ別の世代の人の考えがよくわかる1冊だと思います。

教員名	書名	編著者名	コメント
因 京子	魔女の1ダース：正義と常識に冷や水を浴びせる13章	米原万里	<p>本学の学生諸子には国際活動に関心を抱く人が少なくないだろう。少なくとも、面接で志望動機を訊かれてそう答えた人は多いはずだ。そんなことは言わなかったと胸を張り(？)、外国と関わるつもりなどないと傲語する人でも、交通や通信手段の発達が加速化する今日、異文化と無縁に一生を過ごすことは難しい。異文化を理解する力は、21世紀を生きる者にとって必須要件である。本書を読めば、「異文化と向かい合う」ということがどのようなことなのか、相当ほんやりした人にもうっすらとわかるだろう。そして、それが自分の人生を豊かにするだろうという予感的確信を得るだろう。本書の著者は、類まれな言語の使い手であり、対象への透徹した批判力と深い愛情を持つ優れた書き手であったが、早世したため著作は多くない。本書を皮切りに全てを読むことをお勧めする。読まずに死ぬのは惜しい本ばかりである。</p>
福本 優子	ケアの本質：生きることの意味	ミルトン・メイヤロフ/著：田村真、向野宣之/訳	<p>私が大学1年生のときに会った本です。看護師が対象をケアしようとするとき何が大切か、必要なことは何か、そもそも看護の対象である人間とは何か、について考える機会があり、その時に読んだ本です。『ケアの本質』は、看護師になってからも読み返し、専門職で在り続けることができるように振り返るときに使っていました。『狼に育てられた子』は、カマラとアマラの養育日記を読めば、ヒトが人間になる過程を理解できるかと思えます。わかりやすい言葉で書かれていますので、看護師を目指すみなさんにはぜひ一度読んでほしいと思います。</p>
	狼に育てられた子：カマラとアマラの養育日記	J. A. L. シング/著：中野善達、清水知子/訳	
	レポート・論文の書き方入門	河野哲也	<p>大学ではレポートを書く機会がたくさんあります。私が大学1年生のときに、初めてレポートを書くときに参考にした本です。どのような手順で書き進めるとよいか、具体的な書き方や注意点が示されています。レポートの書き方についてたくさん本がありますが、ぜひご自分にあった1冊を見つけておくことをお勧めします。</p>
福島 綾子	どうせ死ぬなら「がん」がいい	中村仁一、近藤誠	<p>批判もあると思いますが、いろいろな角度から、いろいろな論点から考えるきっかけになると思います。人は突然死にます。だからこそ、隣にいる大切な人と「死」について語ってください。自分の「死」について、大切な人の「死」について考えてみてください。</p>
	君の臍臓をたべたい	住野よる	<p>2016年の本屋大賞ノミネート作品ですので、いろいろな場で目にする機会があると思います。この衝撃的なタイトルから、きっと結末は想像できないことでしょう。きっかけは何でもいいです。とにかく、たくさんの方に興味を持って、手に取っててください。読みやすい本ですので、読書を始めるきっかけとしてお勧めします。</p>
	救えたはずの生命：救命救急センターの10000時間	矢貫 隆	<p>私が勤務していた日本医科大学付属病院 高度救命救急センターでの取材をもとに、1990年代の救急医療の現状、日常が書かれています。本当は、作者が同センターでの取材をもとに書いた「自殺 生き残りの証言」をお勧めしたいのですが、3冊のタイトルを並べてみた時にちょっと衝撃度が大きかったので今回は遠慮することにしました。しかし、私の考え方を大きく変えた、今でも大切にしている1冊です。</p>
後藤 智子	自然に生きて	小倉寛太郎	<p>本書の作者は、「沈まぬ太陽(山崎豊子原作)」のなかで、過酷な左遷人事に屈することなく人としての誇りと信念を貫いた主人公、恩地元のモデルとされた人である。タイトルには、作者の、いかなる状況下でも自然体で人として当たり前の道を選んできた軌跡と、広大なアフリカの大自然は人の人生を包み込むという思いが込められている。作者は人生には「余裕とユーモアとふてぶてしさ」が必要だという。作者が得た父親の教えや体験からの学び、東アフリカでの学びが平易な言葉で語られ、今を生きる私たちに温かなメッセージとして届く。作者は「こんな男の人生が珍しがられるようでは世の中おかしい」というが、「one of themで仕事をするな」「借り衣装だけの人生はやめよう」という言葉には、働くことや生き方を問われている気がする。また本書で語られた「沈まぬ太陽」の誕生エピソードにも胸を打たれる。「沈まぬ太陽」と一緒に読むことをお勧めしたい。</p>

教員名	書名	編著者名	コメント
濱元 淳子	外科の夜明け：防腐法-絶対死からの解放	J・トールワルド/ 著：大野和基/訳	麻酔が存在しなかった150年ほど前の時代では、患者は苦痛のあまりに絶叫しながら死を迎えていました。その後、吸入麻酔が開発されましたが、術後の傷口の処置が不完全なため、感染症をおこし、悪臭の中、死んでいったと言われています。この本には、麻酔手術が成功するまで、そして感染症を克服するまでの医師と患者の苦悩が生々しく描かれています。医師たちに次々に襲いかかる困難と、それらの克服。現代医学の先駆者たちの話です。
	ケアの本質：生きるこの意味	ミルトン・メイヤロフ/ 著：田村 真、 向野宣之/訳	1970年代に出版された本ですが、『ケア』に関する普遍的な要素が書かれており、現在でも読む価値のある優れた本です。看護に特化した『ケア』ではなく、世話、保護、介護、気配りなどあらゆる側面から『ケア』の本質について述べられています。メイヤロフは、「ケアすることを通して相手の自己実現を促し、また結果的にはそれと同時に自分の自己実現をすることになる」と述べています。看護師として、『ケア』することの意義の一つを見出すことができた本です。
	グッドラック	アレックス・ロビラ、フェルナンド・トリアス・デ・ベス/ 著：田内志文/訳	この本は、世界50ヶ国19言語で出版されており、読んだ者を成功に導くといわれている本です。読み進むうちに、今までの考え方が変わってしまうような小説でした。自分の人生は自分にしか作ることはできないし、また、幸運というものは、自ら動かない限りは決して訪れません。地道に努力し、下ごしらえをすれば、必ず成功にたどりつくと感じさせてくれる本でした。この本を読んでから、「今日すべきことは、今日中にする」を心に誓いました。
原田 紀美枝	ノロに見舞われて：ノロウイルスに立ち向かった医療現場：壮絶な35日間の記録	宮路重和	2012年にノロウイルスの集団感染が院内で発生し、多くの高齢者がお亡くなりになりました。マスコミからは、医療機関の認識の甘さが問われましたが医療機関の対応がすべて悪かったわけではありません。当事者だからわかること、起ったことの検証の重要性を学ぶことができます。これから、実習で医療機関に行く皆さん自身の健康への意識改革にもつながります。
	手のひらから広がる未来：ヘレン・ケラーになった女子大生	荒 美有紀	16歳の時に神経線維腫症Ⅱ型という病気になり全盲・全聾・手の障害などを持つ大学生の手記です。1年生のうちに一度読んでみてほしい本です。
	面倒だから、しよう	渡辺和子	面倒くさいと感じることは避けて過ごしたいのですが、その面倒くさいことに向き合うことが、最終的には自分にゆとりが出てくることだと思います。自分のことを面倒くさがりだと感じている人はぜひお読みください。
エレーラ カディョ ルルデス ロサリオ	医者はいないところで：村のヘルスケア手引書	デビッド・ワーナー/ 著：キャロル・サマン、 ジェーン・マックスウェル/ 協力：河田いこひ/ 訳	日本でも医者がないところが増加している。医者がないところで慢性病や感染症の予防、薬剤の使用法、代替医療、母子保健など、コミュニティボランティア、ヘルスワーカーや地域住民による活動を支える一冊。日本語版も英語版もインターネットにて無料ダウンロードできます。
	砂漠の女ディリー	ワリス・ディリー/ 著：武者圭子/訳	ソマリア遊牧民出身少女の現実物語。著者ワリス(スワヒリ語で砂漠の花)が5歳でFGM(女性性器切除)を受け、13歳で60代男性との結婚から逃れるために砂漠に走り出し、様々な困難を乗り越え、数年後ヨーロッパでスーパーモデルになった。文化と慣習について考えさせる本です。
	Leave no nurse behind : nurses working with disAbilities	Donna Carol Maheady	障がいを持ちながら医療現場で働く看護師、障がい者に看護を提供する看護師のための本です。障がいがあっても好きな職業に就き、夢を叶う。障がいの有無に関わらず、異なる価値観や考えを有した多様な人材が活躍できる社会につながる。多様性に関心がある学生にお勧めします。

教員名	書名	編著者名	コメント
姫野 稔子	壊れた脳生存する知	山田規敏子	本書は、脳血管疾患の次第に重篤になっていく症状を医師である患者自身が綴った貴重な記録です。脳出血を繰り返すたびに、高次脳機能障害や空間性認知障害、記憶障害、注意力低下が進んでいきます。我が身に生じる不可思議な現象に困惑・混乱しながら対処していく様子を、医学的分析と共通的に記述しています。悲観に走らず、過度の滑稽という自己韜晦にも陥らない淡々とした描写は、読む者をありありと事実に対峙せしめます。「突き出ているはずの便器が背景と同じように平面に見えたりする」という想像を絶する現象を体感的に描写した記述は、他の専門書にも見ることができない一冊となっています。
北條 智子	理科系の作文技術	木下是雄	大学では、講義や実習での学びをレポートにまとめる機会が多い。論理的に思考し文章化することが求められるが、自らの考えを簡潔で読み手が理解できるように伝えることは非常に難しい。本書は、明快・簡潔な表現を追求し、目標を定め論理的に文章化する際の具体的な方法が述べられている。レポートを書く前に、是非熟読してほしい一冊である。
	アントン：命の重さ	エリザベート・ツェラ/著：中村智子/訳	本書は、第二次世界大戦中ナチス政権下にあったドイツで「生きるに値しない命」として障害のある子どもや精神に障害がある人を計画的に殺害した歴史上の出来事をもとに書かれ、ナチス政権に屈することなく、希望を持ち生き抜いた障害児アントンと家族の物語である。いじめや差別、虐待が常に存在する現代社会に生きる私たちに、命の重さとは何かを改めて考えるきっかけを与えてくれる一冊である。
	こころの病を生きる：統合失調症患者と精神科医師の往復書簡	佐野卓志、三好典彦	本書は、統合失調症患者と主治医である精神科医が往復書簡を交わすことで、互いに「こころの病気」について率直に語り合い、ともに成長していくプロセスを描いている。目に見えない病気と言われる精神疾患を理解する上で、まず患者の体験世界を知り寄り添うことが重要であると教えてくれる一冊である。
本田 多美枝	14歳からの哲学：考えるための教科書	池田晶子	大学では、大学受験という画一化した教育からいち早く脱し、自分で考えることを主体に学問を展開していかなければならない。考えること、すなわち哲学の本質はなかなか難解な領域である。その中で、著者は14歳という中学生を対象に語りかけるような記述で書き進んでいるが、大学生対象としても十分示唆に富む内容である。考えるための教科書と銘打って書かれており、繰り返し読み進めていくことで、大学生として「考える」ことの意味が明白になっていく面白さを実感して欲しい。
	知的複眼思考法：誰でも持っている創造力のスイッチ	苅谷剛彦	一般的に常識といわれる概念にとらわれた単眼思考では、自分の頭で考えることはできない。自分自身の視点から物事を多角的に解析し、考え抜くのが複眼的思考法である。本書は、大学教育、一般的な社会事象に対し複眼的に考え抜く思考法を、具体的な事例を提示して展開しており、内容は分かりやすかつ秀逸である。結果多くの大学生がベストティーチャーに選んでいるのはうなづける。是非、是非読んでほしい。
石山 さゆり	心はすべて数学である	津田一郎	研究でご指導いただいている物理数学者である津田先生が記した最新著書です。タイトルは意表を突くものですが、長年力オスの観点から脳の研究をされてきた先生が、心の働きには数学的真理が隠れていると考えるに至った経緯が記されています。以外にも看護に関連するヒントがあり、大変興味深い本です。
	人生の基盤は妊娠中から3歳までに決まる：人生でいちばん大切な3歳までの育て方	白川嘉継	私が胎児の研究を進めていくうえで一番強く思っているのは「胎児はすでに立派な人間であり、母子の絆つくりは生まれてからでは遅すぎる」ということです。そのように考えていた矢先出版されたのが本書です。看護学生としても、これから子供を授かり、育てていく皆さんにぜひ読んでほしいお勧めの本です。著者は福岡県の小児科医です。
	子供の「脳」は肌にある	山口 創	肌に触れることの意味、効果について身体生理学者が記した書です。肌に触れることは、心、体、頭の発達に影響するという目からうろこの内容です。意識、無意識に限らず肌に触れる機会の多い看護職必読の書です。

教員名	書名	編著者名	コメント
清末 定美	舟を編む	三浦しをん	出版社の営業部員が辞書編集部へ異動となり、辞書の作成や編集過程での苦労や留意点等が関わる人物の仕事ぶりを通じて描かれています。現代は情報が溢れ返り、ネット検索で多くのことは知り得ますが、物事の本質的な「言われ、意味」については辞書を引く作業は外せず、読んだ後に1冊の辞書の重みを感じる本です。
	人は見た目が9割：「超」実践篇	竹内一郎	表題だけを見るとその通りと言いがちですが、見た目之美醜で判断することではなく、見た目にはその人の生活過程で身につけてきた表情や所作など、本質的な部分が表れると言っています。表情などの非言語的情報にも配慮することで人の印象は変わりますし、自分の襟をただそうと思わせる本です。
	私は見た!ルポ看護という仕事：患者、ジャーナリスト、看護師自身の眼と言葉で看護を「見える化」する	早野ZITO真佐子	医療福祉ジャーナリストが一般人の視点から、看護場面や看護師の姿を描いています。現代の医療現場では欠かすことのできないチーム医療についても述べられ、看護師は医療界では「横糸」のような存在であり、大切な社会資源だと気づかされる1冊です。
小林 裕美	科学者が人間であること	中村桂子	生命科学を専門とする著者が、東日本大震災を機に、科学とは、科学者とは何かについて、そして「生きていること」に向き合って「どう生きるか」について問い直している。科学論や科学史に関する他の書籍のような難解さがなく、身近な話題から科学の課題を説いている。しかし、看護は、健康の側面から「生活していること」に焦点を当てて探究し、価値を見出して、これも科学であると考えてきた。従って、あまりにも当たり前のことで、立ち位置が逆だとも感じるが、看護にとっての追い風だと捉えておきたい。
	発想法：創造性開発のために	川喜田二郎	問題解決技法として広く普及している「KJ法」の原点となる本である。KJ法はグループで課題をまとめるときに便利である。しかし、その土台となる「野外科学」や「W型問題解決モデル」を知らない人も少なくない。方法論の簡便さ故に単なるカード集めの手法と思われるが、複雑な時代に有効な科学的手法であることをぜひ知ってほしい。
小手川 良江	博士の愛した数式	小川洋子	事故で80分しか記憶を維持できない数学者と家政婦の母子の物語です。80分しか記憶を維持できないことでコミュニケーションも難しいのですが、お互いに相手を思い工夫しながら交流する様子に感動しました。相手を思いやり関わる姿に感銘を受け、自分の看護観を考える機会にもなりました。
	舟を編む	三浦しをん	この本は、一つ一つの言葉を大切に扱い、15年の歳月をかけて真摯に向き合い辞書を編纂するまでの物語です。私にとっては、日々の中で安易に使っている言葉について考えるきっかけになりました。また、目的に向かって一途に努力する姿に感銘を受けました。自分の強みや取り組み姿勢についても考える機会になる本だと思っています。
	西の魔女が死んだ	梨木香歩	読んだ後に心があたたかくなる本でした。大学生活は楽しさも苦しさもあると思いますが、心が疲れたと感じた時に読んでもらいたい本です。

教員名	書名	編著者名	コメント
松中 枝理子	看護の約束：命を守り、暮らしを支える	秋元典子	新人看護師として働き始めて、「看護とは何か？」という問いにぶつかったことがあります。その時に有名な理論家の看護理論に戻っても、自分が関わっている看護実践と理論を結びつけ、納得できる答えを見出すことはできませんでした。そんな時に出会ったのが本書でした。本書から看護師としての役割、看護の専門性について考えるヒントをもらったような気がしました。これから看護を学ぶ方も理解しやすいように多くの事例が挙げられている1冊だと思うので、看護理論を学ぶ前に是非読んでいただきたいと思います。
	カラフル	森 絵都	本書を読み、心から「自分の人生は自分の好きに生きていいんだ。」と思えた1冊です。周囲の人の顔色を伺い、周囲の人に合わせるばかりの人生ではなく、失敗したっていい、自分自身を表現し、自分の気持ちに素直になって生きていくことの重要性に気付かされました。大学4年間という時間は長いようで、あっという間に過ぎてしまいます。自分がこの大学で何を学び、卒業する頃にはどんな人間になっていたいのか考え、自分の意思で充実した大学生活を送ってほしいと思います。
	思考をやわらかくする授業	本田直之	人の思考は性格や年齢とは関係なく、どんどん固くなってしまいます。しかし、「自分の思考」に縛られるのではなく、常に疑問を持ち、様々なことに挑戦していったほうがいいと思います。本書はその気持ちを後押ししてくれる1冊です。入学当初の新鮮な気持ちを忘れかけた頃に読んでみてください。
中平 紗貴子	考える練習をしよう	マリリン・バーンズ / 著：マーサ・ウェストン / 絵：左京久代 / 訳	子どものための～とありますが、むしろ大人が読んでもいい本だと思います。語りかける口調でとても分かりやすいです。考えるとはどういうことなのでしょう？文中には、練習問題がたくさん出てきます。P54を見た時、皆さんには何が見えるでしょうか。考えることを考えてみてください。
	嫌われる勇気：自己啓発の源流「アドラー」の教え	岸見一郎、古賀史健	題名にひかれて読んでみようと思いました。青年と哲人との掛け合いで話は進んでいきます。青年が言う内容は私も同感できる部分が多いと感じました。ただ、哲人の意見をきくと、言われていることは分かるが今まで避けてきたような気がしました。要は嫌われる勇気は自分自身の勇気の問題ですね。この本はアドラーの心理学を基に書かれています。物事の見方には色々な視点があるものですね。
	死ぬ瞬間：死とその過程について	エリザベス・キューブラー・ロス / 著：鈴木晶 / 訳	看護職になると、人の死に立ち会う場面も多々あります。その瞬間までに、人はどんな過程を経るのか。死が身近に迫っている方々の言葉が印象的でした。私はそういった患者さんに対して、そこまで考えられていたのだろうか。もし自分が死に直面した時、そんなに冷静になれるのかと思った場面もありました。皆さんはどう思うでしょうか。
中村 光江	わたしを離さないで	カズオ・イシグロ / 著：土屋政雄 / 訳	カズオ・イシグロは長崎生まれの日系イギリス人作家である。国内ではあまり知られていないかもしれないが、国際的評価は高く、村上春樹などとともに将来のノーベル文学賞候補とも言われている。はじめは、ありきたりの日常生活が淡々と描かれているように思えるが、抑えた表現の端々から登場人物の背景がわかっていくにつれ、種としての人間に対する様々な疑問が、息詰まるような冷たい罪悪感とともに湧き上がってくる。これ以上の詳しい紹介は読む醍醐味を損なうことになるので控えたい。現代に生きる誰にとっても一読の価値があると思うが、看護を学ぶ皆さんにはぜひ読んでいただきたい。
	スタンフォードの自分を変える教室	ケリー・マクゴニガル / 著：神崎朗子 / 訳	著者は、人々がストレスとうまく付き合い健康的選択をするよう援助する中で、「意志力」に対する思い込みが不要なストレスを生み成功を妨げていることに気づき、「意志力の科学」という公開講座を開催するようになった。本書はその講座を書籍化したものである。「意志力」でなければ、何が自己変容の鍵となるのか？本著では、心理学、経済学、神経科学、医学の各分野からの見解を取り入れた示唆を、理論を交えながら実行可能な形で紹介している。健康問題にかかわらず、自分を変えたい人には発見があるかもしれない。
	選択の科学：コロンビア大学ビジネススクール特別講義	シーナ・アイエンガー / 著：櫻井祐子 / 訳	著者はインド出身のシーク教徒である両親のもと、宗教や慣習による厳格な決まりの中で生きてきたが、米国に移住し「選択」することが「力」であることを学んだ。著者は多くの実験から「選択」が「力」ある側面だけでなく、自分自身の選択が本当に自分の考えによるものなのか、あるいは選択肢が多いほど幸福感が大きいのか、などの疑問に答えていく。毎日が選択の連続である皆さんにとって、選択にまつわる様々な気づかせてくれる興味深い著書であろう。

教員名	書名	編著者名	コメント
乗越 千枝	ケアの本質：生きることの意味	ミルトン・メイヤロフ/著：田村 真、向野宣之/訳	表紙を開くと大きな文字で読みやすいのかと思いきや、理解するのはなかなか難しいかもしれません。読みにくいのは翻訳本であるという理由もありますが、訳者がその言葉や文章の本当の意味を読み手に正確に伝えようとする姿勢からだと思います。(原題はOn caringです)巻末に多くのページを割いている付録と突き合わせながら読まれるとよいでしょう。最後まで読みすすめると副題の「生きることの意味」が腑に落ちます。今後、様々な看護場面で行き詰ることや「自分がなぜここにいるか」と自問自答することがあるかと思いますが、この本を開くとそのたびに違うメッセージを受け取ることができます。安価ですので手元においてスルメのように味わってほしい書です。
小川 里美	戦後日本の看護改革：封印を解かれたGHQ文書と証言による検証	ライダー島崎玲子、大石杉乃/編著	第二次世界大戦後、日本の看護教育制度、看護師制度がどのような過程を経て変革されたのか、貴重な資料をもとに記載されています。看護を学ぶにあたり、是非、一読してほしい書物です。
	Medic : the mission of an American military doctor in occupied Japan and wartorn Korea	Crawford F. Sams	GHQ公衆衛生福祉局局長のサ姆斯医師は、戦後の日本の公衆衛生改革の責任者であり、わが国の医療サービス・医療・看護の質向上のために尽力しました。彼がみた終戦直後の日本の公衆衛生事情とGHQの取り組みが記載されています。是非、「戦後日本の看護改革」と対比させて読んでもらいたいと思います。
	ノーフォールト	岡井 崇	医師も看護師も患者と真摯に向き合い治療に臨んでも結果としてその命を救うことができなかった場合はどうなるのか。当直の産科医が行った緊急帝王切開が医療訴訟となり、医師らが懸命にその原因究明に当たります。医療訴訟が当たり前となったこの時代の背景には何があるのか。筆者のメッセージは、医師だけでなく看護師にも通じる大切な何かを伝えています。
岡村 純	微生物の狩人	ポール・ド・クライフ/著：秋元寿恵夫/訳	クライフの『微生物の狩人(上下)』(秋元寿恵夫訳、岩波文庫、1980)は、筆者が小学生の時代に愛読した借成社版の完訳本である。今、思い起こしてみると、大学受験に際して医学科ではなくて医学部保健学科を目指したのも、大学時代から農村をフィールドとしてコミュニティの健康問題を追究するサークル活動が続けてきたのも、この本の影響と言えるかも知れません。この本は単なる偉人礼賛の医学研究者列伝ではない。研究者の生きた時代と時代が描かれている。とくに、細菌学の黎明期における、伝染病の原因をめぐるパスツールとコッホの学問的戦いは、手に汗握る臨場感で描かれている。エボラ出血熱やジカ熱、マラリヤやデング熱、など新興・再興感染症が重要な健康問題となる今日において、看護職をめざす者の教養の書として、「ジェンナーすら知らない看護師」と呼ばれないように、ぜひ読んでほしい。
大重 育美	子どもの夜ふかし脳への脅威	三池輝久	4月の早い段階で新入生のみなさんにお勧めしたい本です。最近の子どもたちは、短眠傾向といわれています。いわゆる遅寝早起きです。そして夜ふかしの大人たちのもと、乳幼児の睡眠事情も夜ふかしの脅威に晒されています。「夜ふかし」→「睡眠不足」→「疲労感」→「朝、起きられない」→「授業中、居眠り」という負のスパイラルについて教えてください。まさに転換期のみなさんにとって良質な睡眠のヒントをくれる一冊といえます。
力武 由美	オリエンタリズム	E.W.サイード/著、今沢紀子/訳	E. サイードは「野蛮な非文明の東洋」VS「文明の西洋」の対立概念に差別的イデオロギーを喝破し、『オリエンタリズム』において東洋趣味の意の「オリエンタリズム」を「東洋を支配し再構成し威圧するための西洋の様式である」と再定義した。オリエンタリズムを引きずる今日の世界に、A. マリクの『郊外戦争は起こらないだろう』は次のような比喩で警鐘を鳴らす。世界中から移民や亡命者が流入する空間「郊外」は、グローバル化する地球の捌け口を失ったエネルギーが、まともな危機管理もなされぬままに充滿している巨大な「原発」のようなところで、上手に統御すれば国中を照らし出すけれど、放置しておく「原爆」になりかねない、と。グローバル化により私たちは国際の中で相互依存の関係に在る現実を認識し、お互いが責任分担し、「人間らしさに徹して」生き抜いていこうと、緒方貞子著『共に生きるということ—be humane』は伝えている。
	La guerre des banlieues n'aura pas lieu (郊外戦争は起こらないだろう)	A. マリク	
	共に生きるということ：be humane	緒方貞子	

教員名	書名	編著者名	コメント
島崎 梓	新訳被抑圧者の教育学	パウロ・フレイレ/ 著：三砂ちづる/ 訳	著者は、20世紀の教育思想から民主政治のあり方にまで大きな影響を与えたと言われているブラジル出身の教育学者。援助される側の持つ力を信じ、支えることの大切さについて、著者の経験を踏まえて実践的に書かれています。少し難解ですが、国際協力だけでなく、看護や教育にもつながる示唆に富んだ一冊です。
	特殊清掃：死体と向き合った男の20年の記録	特掃隊長	著者は、特殊清掃と呼ばれる遺体痕処理や遺品整理を行う業者の方。孤立死や自殺の現場など仕事を通して、著者が見たものや感じたことが淡々とした文体で書かれています。同じ死に関わる職業人として、またいつかは死を迎える一人の人間として、考えさせられる一冊です。ハートが強い人向けです。
苑田 裕樹	グッドラック	アレックス・ロビ ラ、フェルナンド・ トリアス・デ・ベス/ 著：田内志文/訳	幸運は自分で作り上げるもの。幸運を導くためには自分自身で下ごしらえをする必要があるということ。何か悩んでいるときには忘れていた大切な言葉がこの本にはあります。
	クリティカルケアアドバンス看護実践：看護の意義・根拠と対応の争点	山勢博彰	高度な診療技術や侵襲的な処置が多く行われるクリティカルケアにおいて、看護師に求められる必須の技術と知識を、豊富な文献・根拠を基に解説。臨床で対応方法に議論のある「クリニカル・クエスチョン」に、エキスパートが根拠と臨床知をもって「myサジェスチョン」が提示されています。クリティカルケアのベストプラクティスがわかる一冊です。本学のクリティカルケア領域の先生方も執筆しています。
	ベイツ診察法	リン S. ビック リー、ピーター G. シラギ/著：徳田 安春、石松伸一、 岸本暢将/監訳	医療の原点と呼ばれ、世界中で読み継がれてきた最高峰の指南書。上質なケアに必須な臨床技能がわかりやすく解説されています。最優先の書にして一生ものの価値があると思います。この本でフィジカルアセスメントを極めてみませんか？
鈴木 清史	レ・ミゼラブル	ユゴー/著	「レ・ミゼラブル」というとミュージカルの作品として有名であるが、原作はヴィクトル・ユゴーによる19世紀フランスを代表するロマン主義の大河小説『レ・ミゼラブル』である。邦訳は複数の出版社による文庫版で入手可能であるが、どれも2000ページを超えている。その量に圧倒されるが、原著者による綿密な時代考証と主要な登場人物であるジャンバル・ジャン、コゼット、マリオスそしてまたエポニールらをめぐる丁寧な描写が読み手を魅了している。そして最近改めて読み直してみても感じたのは、究極状況に置かれた人間が経験するジレンマと、その解決策を模索する辛苦がモチーフになっていることであった。それらは、現代に生きる私たちにもあてはまることばかりである。1世紀半を超えて、文字でも舞台でも世界中で支持されている理由を改めて認識できた気がした。学生時代に読んでみてはいかがでしょうか？
高橋 清美	がんを生きる	佐々木常雄	この著書は、がん告知後の患者さんと医療者がどう向き合うのか、さまざまなエピソードを交えながら読み手に問いかけている。「私が死んだあとの家事をたくさん教えなきゃ、寝たきりの私でも役に立つことがある・・」、「小さな子を失った親には子に会える天国、あの世が必要」、「朝になってからのほうが安心して眠れる、チュンチュンという鳥の声と看護師さんの足音が一番の睡眠薬です」、これらの言葉の深い意味を、皆さんはこの大学でこれから学んでくださるのだと期待している。死を告げられると、誰も恐怖や不安を抱えるのだと思う。第8章では、短い命の宣告で心がつらい状況にある人に対し、奈落から這い上がる具体的方法が記載されている。それは、気持ちの整理のために書くこと、泣ける・話せる相手を見つけること、と記されている。これから、看護学を学ぶ新入生にぜひ薦めたい著書である。
田中 千晴	ゆるサバイバル入門：身近な危険から自分を守る!	ふじいまさこ	入浴中に大地震が起きたら、あなたはどうしますか？犯罪から自分を守ることはできますか？・・・大規模災害、日常に潜む犯罪から身を守る術が学べます。大学進学を機に一人暮らしをする人も多いと思います。緊急の時に役立つ連絡先も書いてあり、ぜひ持っておくといい1冊です。
	緊急招集(スタット・コール)：地下鉄サリン、救急医は見た	奥村 徹	阪神・淡路大震災のあった1995年の3月、東京営団地下鉄(現東京地下鉄)で起こった、地下鉄サリン事件を知っていますか？みなさんはまだ生まれていなかったと思いますが、今日の日本でも、同じような化学テロがいつ起こるかわかりません。私の看護師を志すきっかけになったのが、この事件の本でした。事件から今年で20年。その時どんな状況だったのか？看護師である今の自分に何ができるのか？今一度自分を見直すきっかけを作ってくれました。
	アンダーグラウンド	村上春樹	

教員名	書名	編著者名	コメント
田中 時穂	地球に生きる：グレートジャーニーのこどもたち = Alive on the earth	関野吉晴	生まれたばかりの赤ちゃんとその家族、世界の国々で生きる子どもたちとその環境、長い人生を生きてきた高齢者の表情や生活。写真に写る人々の表情やその様子、生活する環境からどのようなことを感じますか？図書館にありますので、ぜひ手にとってみてください。
	老景考：カメラ園長が見せてもらう「老いの世界」	村上廣夫	
	NICUのちいさいのち：新生児集中治療室からのフォトメッセージ	宮崎雅子	
時枝 夏子	世界で一番いのちの短い国：シエラレオネの国境なき医師団	山本敏晴	私は兼ねてからの夢であった国際協力への思いを胸に、約12年前に本学に入学した。そんな私の夢を、現実のものにしたいと決意を新たにさせてくれた1冊。5歳になるまでに3分の1の子どもが死んでいく。そんな国の小さな命たちを守ろうと奮闘している日本人医師の記録である。
	ラッキーマン	マイケル・J・フォックス	Michael J. Foxといえばハリウッド映画、Back to the Futureシリーズで人気の俳優である。これは、人気絶頂の最中にパーキンソン病を患った彼の闘病記である。長きに亘る苦悩を経て「病気に乗っ取られるのではなく、自分が病気を所有する」という彼の決意に胸が震える。
	21番目のやさしさに：ダウン症のわたしから	岩本 綾	著者はダウン症をもつ女性である。大学を卒業して司書資格をとり、絵本の翻訳などを行ってきた彼女のこれまでを、彼女を支えてこられた方々への感謝の思いと共に、綴られている。「1本多い染色体にはやさしさと可能性がいっぱい詰まっている」という母親の言葉を支えに、果敢な挑戦を続ける彼女の生き方に感銘を受ける。
上村 朋子	石巻赤十字病院の100日間：東日本大震災医師・看護師・病院職員たちの苦闘の記録	石巻赤十字病院、由井りょう子	東日本大震災発生から5年が経ちますが、まだ皆さんの脳裏にはあの時の映像が焼きついているのではないかと思います。この本は、津波被害を逃れた災害拠点病院の活動記録であり、極限状態でどのように人は人を守ることができるかが記述されています。赤十字で学ぶ学生として一度は目を通してほしいと思います。
	ザ・仕事：阪神大震災聞き語り	神戸新聞社会部	日本の災害医療を見直す契機となった阪神淡路大震災は、今から21年前、都市部を襲った災害です。現代社会でライフラインが寸断される恐ろしさを知らしめる地震でもありました。当時、「震災ユートピア」という言葉が聞かれ、人々が助け合う姿がしばしば報道されました。しかし、実際にはどうだったのか。この本は、被災地のありのままの様子を伝えてくれる1冊です。
上野 満里	葉っぱのフレディ：いのちの旅	レオ・バスカーリア /作：みらいなな/ 訳：島田光雄/画	生きるとはどういうことか、死とは何かを考えさせられます。美しい写真と水彩の挿絵も魅力的です。
	「待つ」ということ	鷺田清一	現代は待たなくてよい社会、待つことができない社会を19の視点から待つということ問い続けています。日々の生活の中で待つことの意味、豊かさを感じてみたいと思います。
	飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ：若き医師が死の直前まで綴った愛の手記	井村和清	不治の病と闘う青年医師の妻、わが子、両親への思いをつづった遺稿集です。生きること、あたり前の言葉の重さを感じられる1冊です。

教員名	書名	編著者名	コメント
宇都宮 真由子	「死」：宮崎学写真集	宮崎 学	誰もが免れることのできない死。その死の先には何もないのか。それとも何かあるのか。この写真集が答えをくれます。「死は生の出発点である」この意味を知りたいければ、この本を開いてみる価値はあります。
	ホット・ゾーン：「エボラ出血熱」制圧に命を懸けた人々	リチャード・プレ斯顿/著：高見 浩/訳	「エボラ出血熱」のウィルスがアメリカ・ワシントンに出現し、最高度機密保持態勢のもとに制圧されていたというノンフィクション作品。これが自分の身近で起きたらと思うと鳥肌がたつ内容ばかりの一冊です。
	ブラを捨て旅に出よう：貧乏乙女の“世界一周”旅行記	歩 りえこ	アメリカでノーブラ姿を見て、自由の象徴だと捉え、海外には日本にない自由があるのだと感じた筆者が日本にはない何かを求めて貧乏世界一周旅行を記録した本です。ドキドキハラハラしながら、一緒に旅行している気分になれます。
山名 栄子	異端の看護教育：中西睦子が語る	中西睦子/著：松澤和正/聞き手・構成	本書は、雑誌「看護教育」で連載された「ナースよ、リアリストたれ！中西睦子が語る看護と教育」を整理、加筆修正されたものである。聞き手の発問、注釈があり読みやすい。是非、多くの皆さんに読んでいただきたい。
	看護は観察ではじまる	日野原重明/総監修	本書は、観察をテーマに、看護における観察とは何か、観察の重要性を示したものである。看護における観察を考える一冊である。
	「グループ」という方法	武井麻子	本書は、雑誌「精神看護」で連載された「グループワーク」をもとに加筆、まとめられたものである。「グループは特別なものでなくご飯と同じように毎日の生活の中にあるものであること、グループをどうとらえるかは、人間とは何か、生きるとはどういうことかといった哲学『考え方』と密接につながっていること」という著者のグループ観のもと書かれている。グループの捉え方、グループの本質を考える一冊である。
山勢 善江	蒼穹の昴	浅田次郎	19世紀末西太后が政権を掌握していた清代の中国を舞台とした歴史長編小説です。貧しい家族のために自ら浄身し、宦官となって西太后の下に出仕する李春雲、その義兄で同郷の梁文秀は科挙を首席で合格し、官僚制度を上る。彼らと、この時代に実在した人物たちが織り成す壮大な物語です。宦官や科挙など、歴史の教科書で覚えた言葉が現実のこととして描かれ圧倒されそうになります。この小説を読み終わって気づくのは、小さな人間達はうごめき小さな流れや歴史を作る。その小さな流れが大きな流れを変える力にもなりうる。「人間は天命に負けず、世の中を動かすのは宿命ではなく、人の生き様なのだ」ということです。
山内 多恵	博士の愛した数式	小川洋子	人は他人のことをすべて知ることはできません。人の考えている世界を想像しその思いに答えられるように努力をしたとしても、その答えは人の心にはあり正解は分かりません。心の触れ合いを通して、人を想うことのせつなさを感じた本です。読んでいてとても心地よかったです。
	私は誰になっていくの？：アルツハイマー病者からみた世界	クリスティーン・ポードン/著：桧垣陽子/訳	アルツハイマー病患者が自らの体験を綴ったこの本を私が手にしたのは、学生時代に実習で認知症の患者さんに会ったことがきっかけでした。この本は私の認知症に対する見方を変えてくれました。この病気の患者は物事の理解が難しくなるといって大雑把な理解から、この病を患った人にもそれぞれ特有の独自の内面世界があるのだということに目を開かれました。
	わたしはマララ：教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女	マララ・ユスフザイ、クリスティーン・ナラム/著：金原瑞人、西田佳子/訳	史上最年少でノーベル平和賞を受賞した少女の本です。マララさんは教育の重要性を世界に訴えています。みなさんは大学でどんな学修をされるのでしょうか。日本では当たり前のようなことでもこの本を読むとはっとさせられることがたくさんあります。

教員名	書名	編著者名	コメント
柳井 圭子	文系法医学者のトンデモ事件簿	南部さおり	医学と法学(刑法)の間には、深く暗いミゾがある!? と問う筆者は、法学部出身(法学修士取得)で医学博士を取得した法医学者です。世の中の事件はどのように処理されているのか(裁判を通して)ということを知る際、そこに医学の視点もあり、それぞれの見方があるのだと感じさせてくれる本です。
	汚名:「九大生体解剖事件」の真相	東野利夫	筆者の言葉です。「戦争は人を狂わせる。悲惨と愚劣しか残らない」と。医学生として立ち会った「九大生体解剖事件」。そこで何を見、何を思ったのか。そして本書は、恩師である教授に捧ぐとあります。そのえん罪を雪ぐためだとして。
	東大現代文で思考力を鍛える	出口 汪	本書の帯には、「今を生き抜くための教養は、『東大現代文』に詰まっている」とのこと。本当かどうか、チャレンジしてみませんか? 「考え抜く力」が身につくそうです。
吉永 宗義	パラサイト・イヴ	瀬名秀明	3年前にリン・マルグリスが書いた「マイクロコスモス」を紹介した。微小生命(細菌)の出現と大発展、そしてこの地球上の生命と地球そのものが「共生」というキーワードによって解き明かされていく。生命体としての地球の46億年の壮大な物語を綴ったものである。しかし、少々難しいらしくなかなか手に取ってもらえない。そこで、今回「パラサイトイヴ」を紹介することにした。これは、第2回日本ホラー小説として絶賛された大賞受賞作である。ある女性の交通事故から物語は始まるのだが、その後、脳死、臓器移植などの問題を経て、ミトコンドリアの反乱というストーリーが展開される。そして気付く。「マイクロコスモス」を読んでいたからこそ、この本が本当に面白い小説だったことがわかったと。
前学長 浦田 喜久子	武士道	新渡戸稲造/著: 矢内原忠雄/訳	本書は、1889年(明治32年)アメリカ滞在中の新渡戸稲造が、日本の道徳価値について海外の人々に知らせるために著したものである。日本でも翌年翻訳が出版され、その後、英語以外の多くの言語にも翻訳された。約700年にも亘る、日本の長い封建制度の時代に培われた武士道が、近代の日本人全般の日常に生きる信条となって実践されていることを、ヨーロッパの歴史、宗教、文学から類例を引いて説明している。明治10年の当時、日本国民が、赤十字思想をたやすく受け入れた理由について、第五章「仁、惻隠の心」で説明しているのも興味深い。やや難解なところもあるかもしれないが、今も日本人の中に生きている道徳観を改めて意識すべく、是非挑戦していただきたい。